

## 大学からの情報発信について

金沢大学長 岡田 晃

本年4月、21世紀に向けて推進すべき情報通信政策と実現可能な未来像として「情報通信21世紀ビジョン」が郵政大臣の諮問を受けて中間報告として取りまとめられた。その最初の頁では、市場への供給者として参加するプレイヤーが飛躍的に増大し、競争は先進国間を中心とするものからグローバルなものへと質的变化を遂げ、新たなプレイヤーの登場とプレイヤー間の体力格差の拡大により一層熾烈な段階を迎えたグローバルな競争状態、すなわち大競争時代の到来が強調されている。大学においてもインターネットの利用がはじまっており、世界にむけての学術情報の発信も活発になってきているが、その大競争時代を迎える21世紀には、机型ディスプレイつきマルチメディアシステムがすべての教職員に配備され、超高速のマルチメディア統合情報インテリジェントネットワーク環境が整備されて教育や研究に大きな変革をもたらすことが想定されている。

すでにシラバスや自己点検・評価の成果をまとめた報告書の公表という情報発信は珍しくはなくなってきており、大学からの情報発信では、大競争時を迎えることはないとしても単なる研究室や大学の紹介にとどまらず世界へ向けて教育や研究の成果などを中心に発信することが激烈になると考えられる。教育や研究のレベルは、それぞれの大学、研究室などの質に裏打ちされるものであるが、質は大学の使命とされている、たとえば有為な人材の育成、新たな知識の創造と応用などの側面から測られていく。前者の有為な人材の育成は、いわば教育の質にかかわるものであり、学生の知的・人格的発達教育の結果としてどの程度に資質・能力などを向上させたかが測られることになるだろうが、実際には測ることの難しいものである。ただゼミに参加する学生がほとんどいないような学科目の類は、向上させたかどうかを判断することさえ出来ないわけだから、その教育効果の質はまさにゼロに近いといえるのである。後者の新たな知識の創造と応用とは研究の質にかかわるもので、これについてはさまざまな尺度で測ることがすでに試みられている。

言うまでもなく大学から発信する学術情報は質の高い研究成果に裏打ちされる必要があるが、研究という概念についても最近いろいろな意見が発表されているのでこの機会に述べておきたい。平成7年4月、日本学術会議の総会で戦略研究という概念が呈示された。これは英、米で用いられていた「ストラテジック・リサーチ」の言葉の日本語訳である。これまでは興味、好奇心に触発されて展開される基礎研究と実用化、製品化を目指した応用研究とが知られていたが、この間に自分の興味のためにだけする基礎研究とは異なり、明日すぐに役立つような応用研究でもないけれど、恐らく長期的にみると応用につながるような明確な目的志向性をもった潜在力を有する研究を存在させることが必要になってきたからで、これを戦略研究とよんだのである。この研究カテゴリーをおくことによって研究費の流れを円滑にしようとするねらいも有している。知識興味本意である基礎研究と実用上の価値を重視した応用研究との間が切れないようにすることももくろんでいるのである。また「ブルースカイズ」という言葉も最近外国で使われている。これは人間の知的営みで至高とされる知的創造力を基盤とするような基礎研究のことで、「青空研究」とも訳されている。戦略研究というよりも大学では本来この青空研究が主体となっており、今日これらの概念を十分理解しながら秀れた研究を展開することが要望されていて、これらを基盤とした大学からの情報発信によって優れた、有用な情報源としてそれぞれの大学の声価も高まってくるのである。基礎、または戦略、あるいは応用研究であれ、結局のところ西田幾太郎先生が述べられているように「人情のために」するのであり、この「人情」とは「人々の幸せを願う心」と解されているので、人々の幸福に結びつくものでなければならぬ。